空とぶ家

ウォルター＝ホッジス作

渡辺茂男訳

933 Hodges, Walter
(NDC)

空とぶ家

ウォルター＝ホッジス著　渡辺茂男訳

学習研究社

174p　図　23cm　(新しい世界の童話シリーズ)

原題：The flying house

■この本の内容に関する問合せ，製本上のミスなどありましたら，下記あてお願いします。
文書は，東京都大田区上池台4—40—5（〒145）学研ユーザー・サービス部「児童図書係」
電話は，東京(03)720—1111(大代表)へ

新しい世界の童話シリーズ
空とぶ家
ウォルター＝ホッジス著
訳者　渡辺茂男
発行人　渡部ひろし
編集人　石井和夫
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒田製本所
発行所　株式会社学習研究社
東京都大田区上池台四丁目四十番五号
振替東京八—一四二九三〇
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

©1965
無断複写複製（コピー）を禁ず

5326

Printed in Japan　＊定価はカバーに明記してあります。

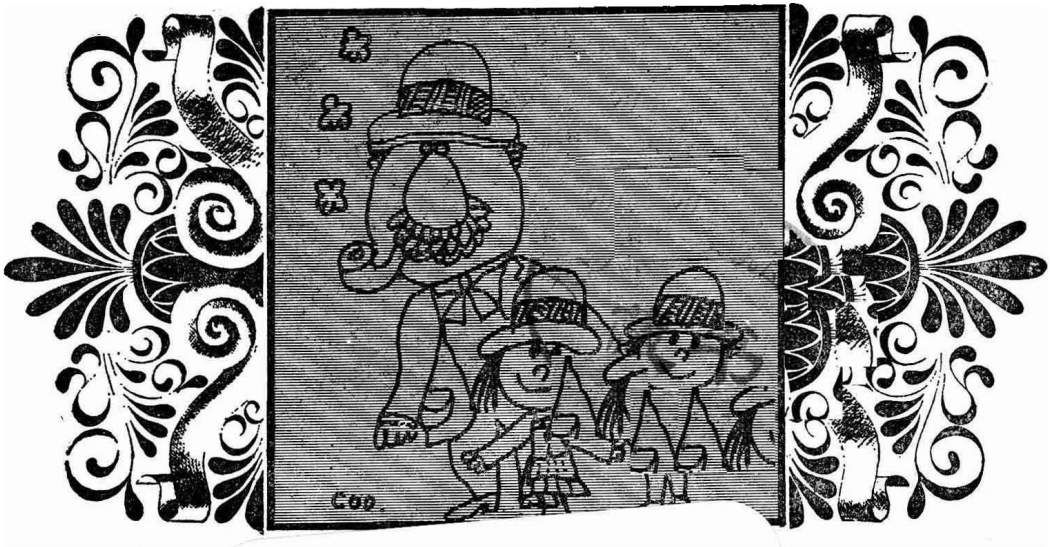
空とぶ家

ウォルター＝ホッジス作

渡辺茂男訳

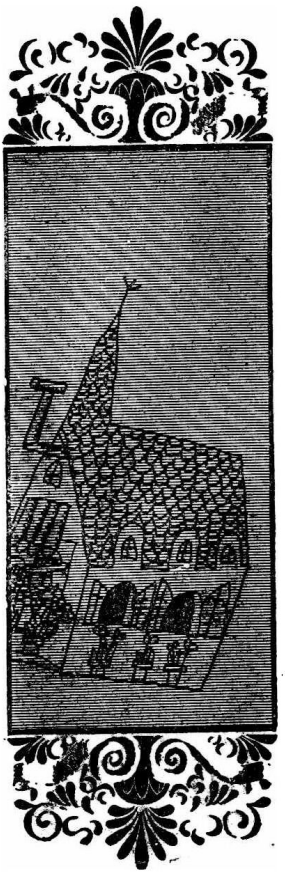
久里洋二画

THE FLYING HOUSE



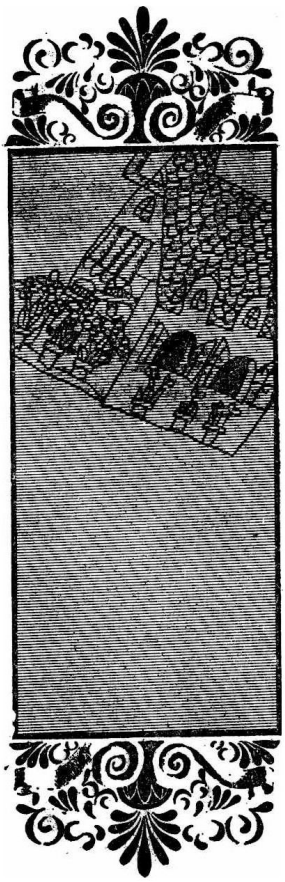
The Flying House

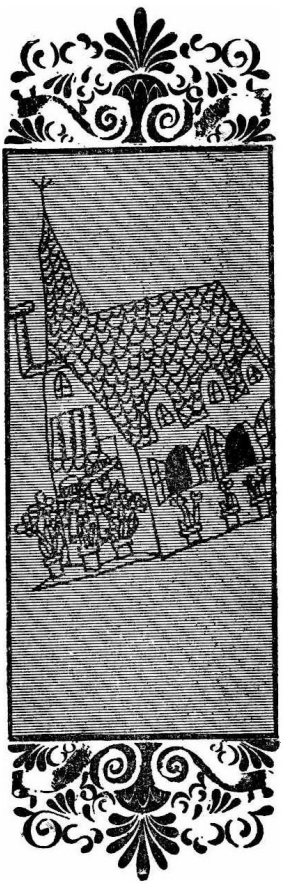
空とぶ家　もくじ



家が空にうく　5

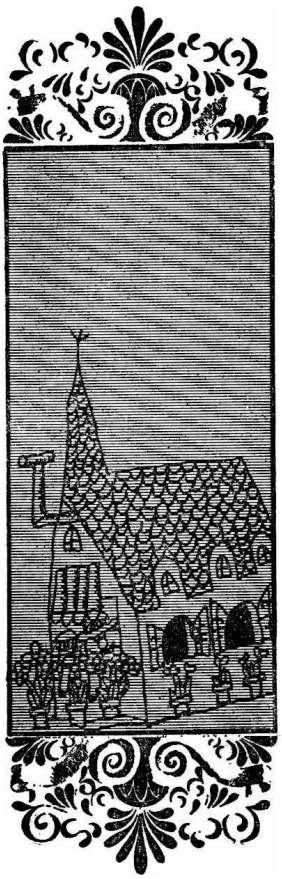
49　家は、どんどん空にあがる





おちはじめた家(いえ)　89

131　空(そら)とぶ家(いえ)、ついにかえる



デザイン・江口　進

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

●編集委員

<50音順>

独・北欧児童文学翻訳家　大塚勇三

青山学院大学講師
英米児童文学翻訳家　神宮輝夫

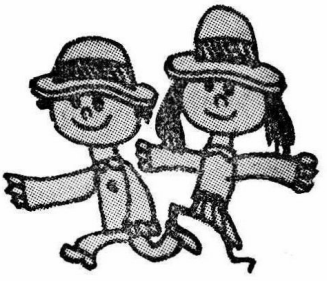
国立音楽大学教授
フランス児童文学翻訳家　塚原亮一

慶応義塾大学助教授
英米児童文学翻訳家　渡辺茂男

●訳者のご紹介

この本を訳された渡辺茂男先生は，1928年に静岡県に生まれ，慶応義塾大学文学部ご卒業後渡米，ウェスタンリザーブ大学大学院をおえられて，ニューヨーク公共図書館児童部に勤務されました。現在は，慶応義塾大学文学部図書館学科助教授のかたわら，児童図書研究会のメンバーとして，英米児童文学の研究翻訳をしておられます。おもな訳書には，『児童文学論』(岩波書店・共訳)『三人のおまわりさん』(学習研究社)『エルマーのぼうけん』(福音館)などがあります。

家が空にうく



これから、わたしが、みなさんにお話しするニッキイとリンダのぼうけんは、ふたりのおとうさんが、キャラウェイという、とおい国へでかけている、るすのあいだにおこったできごとです。

ふたりのおとうさんは、鉄道技師で、しかも、じゅうようなやくめをもっていました。というのは、ふたりのおとうさんは、キャラウェイのおく地のジャングルで、その国ではじめての鉄道をしくことになっていたのです。

おとうさんは、まる一年、あるいは、もうすこし長いあいだ、家をるすにすることになっていました。ニッキイとリンダは、おとうさんといっしょにいきたかったのですが、おとうさんは、わら

って、ふたりのいうことをあいてにしてくれませんでした。キャラウェイのジャングルは、ふたりのような子どものいくところではない、というのです。

そのとき、ニッキイは十才で、リンダは九才でした。あるいは、ふたりは、もうすこし、おさなかったかもしれません。でも、よくわかりません。もしかしたら、もっと大きかったのかもしれません。

その年のおやすみに、ニッキイとリンダのおかあさんは、いつもとおなじように、ふたりを、ジェディーさんご夫婦のすんでいる、いなかへいかせました。ニッキイとリンダは、ジェディーさんご夫婦のことを、ほんとのおじさんとおばさんではないけれど、ベンおじさん、デイジーおばさんとよんでいました。

このふたりがいくつなのか、ざんねんながら、わたしは、よくしりません。でも、ベンおじさんは、「おじいさん」ぽくって、デイジーおばさんは、いくらかわかくて、まあ「中年のおばさん」でした。ふたりのせいかくなとしはよくわかりませんが、ふたりは、とてもほがらかなご夫婦で、子どもがだいすきでした。

ふたりには、ロバートというむすこさんがありました。ロバートは、もう、りっぱなおとなで、船のりになっていました。そして、いつも航海にでているので、ニッキイとリンダは、めったにロバートにあうことがありませんでした。

ベンおじさんも、わかいときは、船のりの一種でした。ほんとうの船のりではなかったとしても、燈台もりをしていたのです。としとったいまでも、燈台もりの服そうそのままに、ひさしのついたぼうしをかぶり、こん色のとっくりセーターをきています。この服そうのほかに、へんなときに、あらゆる種類のへんなものをきています。——へんなうわぎや、へんなシャツにへんなえり、（えりといっても、つけかえのえりを、へんなときにつけるのです。）それに、へんなくつした。すぐにわかりますが、ベンおじさんは、からだの小さい、へんな人です。

デイジーおばさんは、ベンおじさんのことを、いつでも、じゃまものあつかいにしていました。もちろん、ほんとうにじゃまものだと思っていたのではありません。デイジーおばさんは、いつでも、じぶんのやりかたで、きちんとしていた

のに、ベンおじさんは、いつでも、だらしがなくて、ものわすればかりしていたのです。

デイジーおばさんが、これいじょう、家の中がきれいにならないと思われるほど、きちんとせいりをすると、そこへ、ベンおじさんがはいってくるのです。きたない、古いどうぐばこをさげてきて、へやじゅうに、ねじくぎや木くずや、はりがねのきれはしを、ちらかすのです。

「まあ、ベン。あなたのそのかっこうは、なんですか！」と、デイジーおばさんは、大きな声でいいます。「それに、わたしのそうじしたへやを、こんなによごして、ほら、ごらんなさい！　せっかく、イェーツさんのおくさまを、お茶にごしょうたいしようと思ったのに！　ひとさまが見たら、あなたは、いつでもブタ小屋にすんでいると思うでしょうね。ほんとに、あなたには、あきれたわ！　こまったものね！」

「まあ、そんなにしんぱいしなさんな。」と、ベンおじさんは、こたえます。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「わしのつくったジェディー＝ベルじゅうたんそうじ機が、あっちゅうまに、きれいにしてくれるさ。」

だから、こまるのです。ジェディー＝ベルじゅうたんそうじ機は、ベンおじさんがじぶんで発明したものですが、ぜんぜん、やくにたたないしろものです。

ベンおじさんは、たいてい、いつも、なにかを発明していました。発明したもののなかには、せいこうしたものもありますが、ジェディー＝ベルそうじ機のように、せいこうしなかったものもあります。

ベンおじさんは、燈台にはたらいていたころから発明をはじめました。もっとも、デイジーおばさんにいわせれば、ベンおじさんは、燈台では、時間をもてあまして、ぶらぶらしていたというのですが。

ベンおじさんのさいしょの発明は、燈台のあかりにぶつかってくる海鳥をふせぐどうぐでした。海鳥は、あかりにぶつかって死んでしまうのです。（燈台もりならだれにきいてもわかりますが、このような海鳥の事故は、たえずおこります。

ときには、なん百わという海鳥が、燈台のあかりの中にとびこんで目がくらみ、まるで、あかりにむらがるガのように、燈台の大きな光源のレンズにぶつかってくるのです。）

ベンおじさんは、この発明が大せいこうだったので、つぎの発明にとりかかりました。

わたしは、よくおぼえていませんが、それは、おゆがじょうはつしてしまうと、また、しぜんに、水がいっぱいになるというような、やかんでした。

やかんの発明がすむと、ベンおじさんは、たくさんの科学の本をよんで、つぎからつぎへと、わけのわからないものを発明して、家の中は、へんなものでいっぱいになってしまいました。

わたしは、まえに、ベンおじさんは、へんな人だといったでしょう。ベンおじさんは、としをとって、燈台もりのしごとをやめると、いなかに家をもちました。その家が、また、へんてこな家でした。

ニッキイとリンダは、その家がだいすきでした。ずっとむかし、おひゃくしょうが、ムギやコメをたくわえておく、こくもつぐらだったのです。ですから、その家は、ちょくせつ地めんの上にたっているのではなく、きのこのようなかたちをした、たくさんの土台石の上にたっていました。

その土台石は、こくもつをたべにはいってくる、ネズミをふせぐためのものでした。いまでも、いなかにいけば、きのこのかたちの土台石の上にたてられた、古いこくもつぐらを見ることができます。

こくもつぐらといえば、ベンおじさんの家は、そうよばれていました。それは、小さなこくもつぐらでしたけれど、ベンおじさんが、いろいろとすみよいようにつくりかえたときには、けっこう、なんでもおさまるひろさの家になりました。

ベンおじさんは、げんかんの戸のまえに、ポーチをつけました。そして、そこに、ひもをひっぱればなるような、しんちゅうのよびりんをさげました。

家の中は、一かいを居間と台所と、ふたつの小さな寝室にわけました。二かい

は、家の長さそのままの、ひとつのほそ長いへやにしました。

そのへやが、ベンおじさんのしごとべやでした。そのへやは、てんじょう板がはってなく、屋根うらがそのまま見えました。

ベンおじさんのしごとべやへあがるには、居間のてんじょうの、あげぶたをおしあげて、はいっていかなければなりません。ベンおじさんがいそがしいときは、だれも、そのへやへ入れてもらえませんでした。ですから、スリッパをはいて、いそがしそうにうごきまわるベンおじさんの足音がきこえるだけでした。

このスリッパは、デイジーおばさんが、ベンおじさんにはかせたものです。

そうでなければ、おもいくつで、どたどたとあるきまわるので、下にいるものは、うるさくてかないません。

家の外には、小さなうらにわと、いろいろのど

うぐや、じてん車をしまうものおき小屋と、ニワトリ小屋と温室をつくりました。

そうそう、もうひとつ、わすれてはならない、だいじなものがありました。にわにめんした家のひさしの下に、ツバメのすがありました。まい年、夏になると、そのすには、二わのツバメがやってきました。

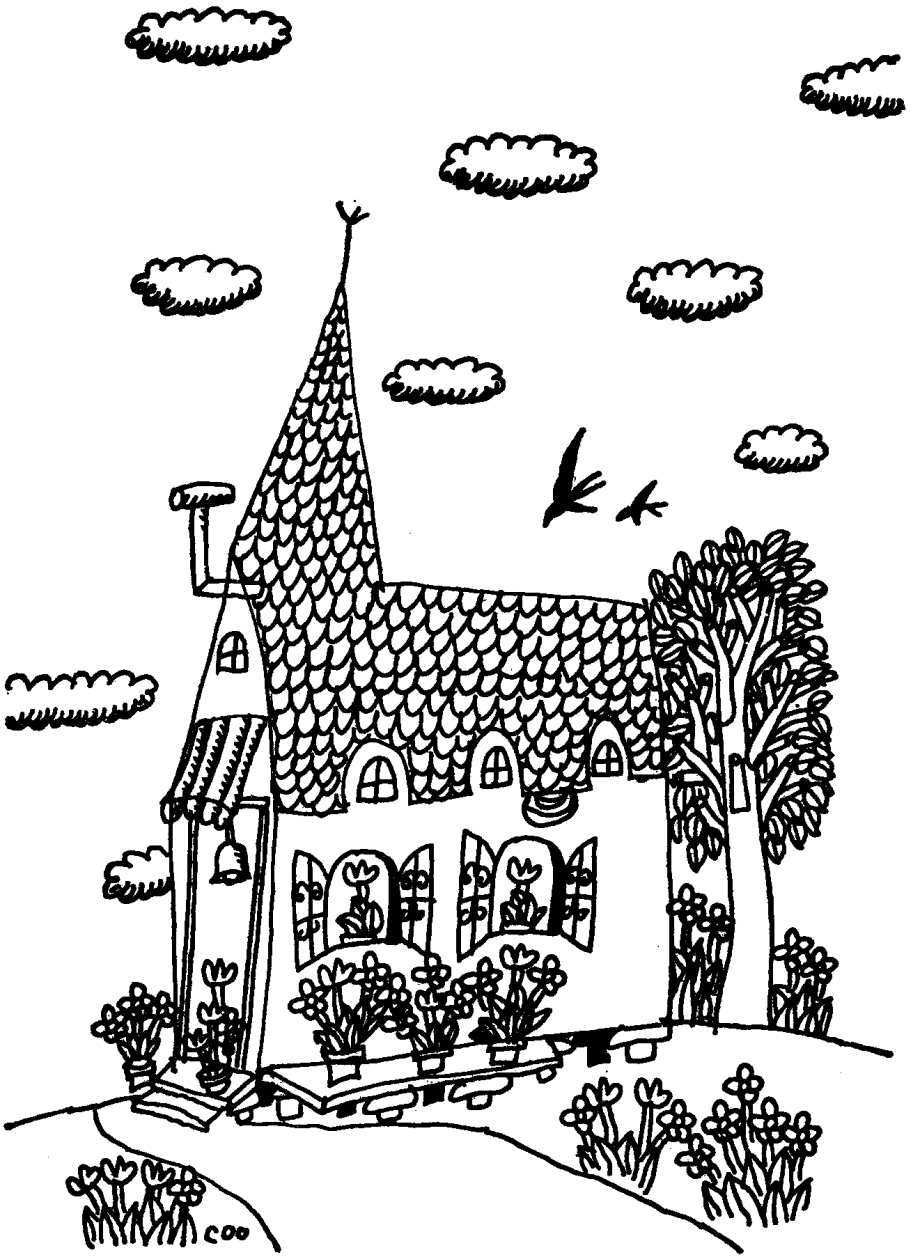
そして、このものがたりの事件がはじまったころ、そのすには、三つのたまごがはいっていました。その話は、また、あとでいたしましょう。

ニッキイとリンダは、ふたりだけで汽車にのっていきました。そして、デイジーおばさんが、駅までむかえにきてくれました。

おばさんは、ふたりを、かわるがわる、しっかりだきしめていいました。

「ベンおじさんが、駅までむかえにこられなくてごめんなさい。きょうは、とてもいそがしいものですからね。」

「なにか発明しているの？」



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com